前飛鳥井老翁一日語られていはく、常德院内大臣美尙公は、天性をゆふにうけさせ給ひて、武藝の御いとまには、和歌に心をふけりまし〳〵て、御才覺もおとなしくまし〳〵ける、○略中去比又逆敵近隣をかすめけるに、いそぎ御進發ありけり、時しも炎天のみぎりにて五萬ばかりの軍兵をめしつれ給ひけるが、士卒此あつさにたへかねて、練汁のごとくなる汗をかき、馬もこらへかねて、多くはひざまづきければ、人皆仰天して、しどろになりにけり、そのところ鏡山のふもとにてありければ、大樹の御うたに、

けふばかりくもれあふみのかゞみ山たびのやつれの影のみゆるに

とあそばされ、しばらく木蔭にやすらひ給ふにすこし程ありて、天くもり涼風おもむろに吹來れば、諸ぐんせいも、中秋夕暮のおもひをなして、たちまちよみがへるがごとしと云々、上古末代まで高名の御ほまれなり、まことに一句のちからにて、數萬の軍兵くるしみをやめらるゝ事、天感不測の君なりといへり、

〔北條五代記三〕北條氏康と上杉憲政一戰の事

聞しは昔、北條左京大夫平氏康は、弓矢をとりて關八州にまういをふるひ、名大將のほまれをえ給へり、○略中氏康の父氏綱、天文六年七月十五日上杉朝定と、河越にをいて合戰し、氏綱うち勝て朝定を亡し、其例にかなひ、戰場かはらず、又此年○天文十五年氏康宿望を達し、勝利を得られし事、弓矢の冥加にかなへる武家くわん東にをいて、名譽の大將とぞ人沙汰しける、

〔續應仁後記三〕畠山家騷動河州落合川合戰事

畠山稙長大ニ悅ビ、武功ヲ感ジ、自筆ノ狀ヲ認テ、三木牛之助ニ賜テ、高屋ノ城エ歸陣セラル、河内守長敎モ感狀ニ太刀鎧ヲ添、牛之助ニ與ヘラル、寔ニ勇士ノ面目也、此牛之助ハ三木攝津守ガ兄弟也、遊佐長敎ノ感狀ニ曰ク、